
叶わない恋

アンゴル・モア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叶わない恋

【Zコード】

Z0466BA

【作者名】

アンゴル・モア

【あらすじ】

灰原哀はコナンの事が好きだけど、はじめて好きになった人には幼なじみの彼女がいた。

『どうして十藤君を好きになつたの…？』

『好きにならなければ、よかつた。』

あなたを好きにならなかつたら、こんなに辛い想いをしなくて済んだのに…』

『蘭：俺はお前の事が…』

『コナン…君？』

すれ違う想い その先に一体、何が待っているのか？！

貴方が好きで（前書き）

哀ちゃんの恋心

貴方が好きで

こんなに近くにいるのに…

どうして貴方は遠いの？

私達は、”友達以上”にはなれない？

……それでもいい。

私は、貴方がことが好き。

『工藤君』…

私の名前は『灰原哀』…

本当の名前は“宮野志保”。

私には本当の名前より、

“灰原哀”の方が似合ひ気がする…。

だって私は名前の通り『哀しい存在』だから…。

一キーンーコンーカンーローンー。

学校のチャイムが教室に鳴り響く。

しばらくすると教室は
騒がしくなる。

「ナン『原…灰…原…』」

灰原

「ナンの隣の席に居る灰原はぼうっとして黒板を見ていた。

「ナンの声は哀の耳には全く入っていなかつた。

「ナン『灰原一！？』

「ナンの声が、教室中に響く。

さつさまで、騒がしかつたクラスメートの声が一気に静まり返つて、
「ナンに視線を向けたが
また何事もなかつたかのように喋り始めた

『何よ！？ いきなり大きな声を出して…びっくりしたじやない！』

『ワリィ、ワリィ… 何回呼んでも返事しねえから、つにつに…』

『ついついってねえ？』

コナン『それより、何でぼうっとしてたんだ？』

コナンは、『きになる』
といつ顔で哀を見た。

返ってきた返事は
素つ気なかった。

灰原『別に…ただ考え方をしてただけよ』

『何だよそれ！可愛くねえなあーー！』

哀はブスッとした。

(どうせ私は可愛くないわ
よーー)

灰原『悪かったわねーー！可愛くなくてーーどうせ私は誰かさんの彼女

みたいに可愛くないわよー。』

『ナン(レ)、怖えーつうか、灰原の奴…』

『ら、蘭は彼女じやねえーよー、ただの幼なじみだつ…。』

ズキン…。

ズキン…。

言葉では詰[足]してこら[止]め[ま]り蘭さんの事好きなのね…。

照れ隠しそひやつて…。

ズキン…ズキン…。

やつぱり、蘭さんには敵わないわね…。

『あり?』

私は蘭さんだとばー皿も言ひてなこわよ?』

『なつ／＼／＼』

『天下の名探偵さんも彼女の事になると冷静さを失うのね?』

コナン『だから! 彼女じゃないって言つてんだろ!!

だいたい、蘭はなあ…。本当にただの幼なじみで…。
だから、別にそつゆう意味で好きって訳じやなくてだなあ…。』

ズキン…。

本当は、

彼女の事、
好きな癖に…

照れ隠ししゃつて。

素直じゃないんだから…。

もしも

蘭さんが本当にあなたの彼女じゃないなら、私とずっと一緒に居て
ほしい。

でも、消して叶わない願い…。

だって、彼が好きなのは、私じゃなくて、『蘭さん』なんだもの…。
私が適う相手じゃないから…！

コナン『それでなあ？蘭の奴…って聞いてんのか？灰原！？』

ズキン…。

『灰…原…？』

こんなに胸が苦しくなるなんて…
苦しくて胸が張り裂けそう…

“どうして 私は彼を好きになつたの？”

……。

好きにならなければ、良かつた。 そうすれば、苦しまなくて済むのに。

あの人には“彼女”（蘭さん）がいるから…。

天使の…。

「私」じゃ駄目なの……？

工藤くん……？

私は、
貴方の“一番”にはなれない。

私は“地獄に墮ちた天使”だから……。彼女と私は、
“正反対”

彼女は天使で……。

私は……。

……。私は何でしじうね？

少なくとも、私は天使じゃない

。

私は……。

『翼の汚れた天使』

でも、工藤君の前では

“心が洗われる気”がするの。

…工藤君。

あなたの前では

。

貴方といいる時は、

私の中に“光”が入つて来るの…。

黒かつた翼が、

少しずつ

白くなつていく様な。

でも、

貴方に『天使』がいる。

“毛利蘭”といいう“天使”が…。

だから、私は“天使”になれない。

私がもし、工藤君の幼なじみで、
蘭さんが幼なじみじゃなかつたら、

私達は

付き合つていた？

…いや。

きっと、

たとえ蘭さんと工藤君が幼なじみじゃなくとも、
二人は付き合っていたでしょうね……。

最初から、私に勝ち目なんて、ないのよ……。

それが『運命』なのだから……。

ズキ……

それが、
蘭さんと私の立場が、逆だったとしても……
。

私に勝ち目はない。

最初から……分かつてたのにね……。
けして“叶わない恋”だつて……。

(……本当に馬鹿ね……
私……)

ズキン……。

ズキン……。

そうだよね?バカだよね……私。
(お姉ちゃん…)

貴方が好きで（後書き）

感想

待っています。

失恋～哀しい想い～（前書き）

やつと書けました！よかつたら読んでください～～～！

失恋～哀しい想い～

『灰原さん？』
『哀ちゃん…？』
『哀ちゃん…！』

光彦と歩美達は必死に哀の名前を呼んでいた。

今、歩美達は下校中である。

(はつ…)

哀は歩美達の声に、
やつと気がついたようだ。

（私…考え方をしていたのね。）

『哀ちゃん…

大丈夫?…さつきから
ずっと迷ひとしたりたけど…』

歩美は哀が「何かあつたんじゃないか」と心配している。

哀もそれに気づいたようだ。

（吉田さん。

心配してくれたのね…。）

『ええ…大丈夫よ。

ごめんなさいね。心配かけちゃって。

』

哀は申し訳なさげにしている。

私のこと、心配してくれて。

』

『おひー。』

『は、灰原さんが
元気で良かつたです／／／』

照れながらに光彦君は
言つた。

『光彦！お前、どうしたんだあ？
顔、真っ赤だぞお？』

元太がそう言うと、
光彦はさつきより

顔を真っ赤にして、慌て否定して、驚いていた。

『へ？／＼／＼

『べつ、別につ！！

な、な、何でもありませんよ／＼／＼

『元太くんの氣のせいですつ！！／＼／＼／＼／＼

光彦はく違うと手を振っている。

『ふーん…』

『なら、良いけどよお…』

元太はあまり気にならなかつたらしい。

『あはは…』

（はあ…）

光彦は元太が深く追求して来なかつたことに、
ホッとしていた。

（危ない、危ない…つと。）

そう思つてゐるのもつかの間。この後、更なる危機が迫ることに、
光彦は気が付かなかつた。

歩美は光彦の耳に顔を近づけて
小さな声で言った。

(ねえねえ!
光彦くん!!)

(何ですか?歩美ちゃん??)

(光彦くんて...)

(は...何でしょつか?)

ひやひや...

歩美は一囁きと少し。

（光彦くさりって、寂ひやんのいじ……好きなことじょへ）と小声で言つた。

光彦は赤くなつて、
慌てて
頭をブンブン振りて否定してくる。

『あ、歩美ちゃん！？
何を言つんですか／＼／＼／＼

ぼ、僕はべ、別に灰原さんの事……／＼／＼／＼

えつと、そのつ…ち、違いますよつ／＼／＼／＼

『あつ…』

気がついたら、光彦は大きな声で言つてしまっていたらしい。

当然、

みんなは驚いていた。

口・哀・歩・元『.....』。

(...光彦君。
言ひやつたよ.....。

)

光彦達は、みんな
シーンと静まり返っていた。

沈黙を破つたのは、灰原だつた。

『あら、私がどうかしたのかしら?』

『えつ？あ、あのつ／＼

灰原さんって好きな人がいるのかなって、

歩美ちゃんと話したんですよーー。』

『まかすようなそぶり。
ものすゞぐ荒てーる。』

光彦は自分の気持ちを、まだ裏には知られたくないのかもしねない。

『 じゃよね？歩美ちゃん…』

困った瞳で歩美に助けを求めている。

歩美は光彦に話しを合わせた。

（光彦くんが困っているのって、歩美のせいだもんねつ…）

(歩美が何とかしなくちゃつ・・・)

『「さー・やうだよー・・・』

『歩美達、哀ちゃんつてどんな人が好きなのかなつ?つて話してた
のつ・・・・・』

(ほつ…)

歩美の言葉を聞いて、光彦は安心していた。

(よかつたです…)

それで、哀ちゃんつて『好きな人』
いるの？

歩美は興味津々に聞いた。

『そうね……いないつて言つたら、嘘になるわね……』

コ・光・元『ええええつーーー!?』

哀の答えに、歩美以外は驚いていた。

みんな『意外』とか、

『想像してたのと全然違う……』とか……。

そんなふうに思っていたらしい。

.....。

哀がそんなことを云ひとは思わなかつたのだらう。

失礼にも程がある。

『何よ？？失礼ね！

私に好きな人がいたら、おかしいのかしら？』

哀は眼を細めて、

コナン達を睨んでいる。

(歩美の事は睨んでいない)

それもそのばす。

コナン達の反応が反応なのだから、

機嫌を損ねても

仕方がない。

三人は怖いのか、怯えながらに答えた。

『い、いや？ べ、別に…
んなことねえよ…！

な、なつーお前ら？』

コナンは「後は任せたつー！」

というよつな目で光彦達を見ていた。

…無責任にも程がある。

光彦は慌てて
言った。

(元太も同様)

「え、ええーそ、
そうですよー灰原さん！」

「そ、そ、うだぜー灰原ーーー！」

(.....)

(本当かしら...?)

哀はまだ三人を疑っていた。

（特にコナン）

三人をまだ怪しいと思いつつも、いつまで疑っても仕方がないと思
い、哀は、

三人を許すこととした。

『まあ、良いわ..

と・く・べ・つに

許してあげる。』

光彦と元太は、ため息をしていた。

余程、怖かったのだろう。今は、

落ち着いている。

一方、コナンは、複雑な表情をしている。
どうやら納得出来ないらしい。

モヤモヤしているのかもしねい。

光彦・元太『ハア……』

（一事はどうなるかと思いました。）

すっかり、安心したのか
元太は小さい声で、

（はあ…。怖かつたぜ。）

と、ぼそっと言つてしまつた。

『…小島君

悪かつたわね…恐くて…？』

… じつやう、哀には
聞こえていたらしい。哀は恐ろしい笑みを浮かべている。

子供でも殺氣を放つているのが分かるくらい。

ゾクつ…。

怖いのか、元太の
体が奮えていた。

元太は、

何とかごまかそうと必死のようだ。

普段あまり使わない頭をフル回転させてている。

何とか、

この場を切り抜ける方法がないかと考えているのだ。

元太は斜め前の家を見て、（はっ！）とした。何か思いついたらし

い。

『ほ、ほらー、そこの家に
怖そうな犬がいるだろ?』

『本当だあーー!』

『そここの犬が怖くてよお?ーだから、灰原の事、怖いって言つたん
じゃなくて…。』

元太は限界なのか、責ざめている。

それに見兼ねたのか、哀は元太を許すこととした。

『そり… ならしいけど?』（充分反省してるみたいだし… ね）

それに、ちょっと小島君が可哀相だし…。

コナンは心の中で、（怖えな灰原…）と思つていた。
哀が聞いていたら、コナンも危険だったわう。

コナンは、
「自分は口に出わなくてよかつた」と思つていた。

元太は心の中で哀が『地獄耳』だという事を知り、

この事をきっかけに、
灰原の前では『怖い』と言わないことを深く決意した。

無論、元太の決意に気づくものは…、誰ひとりとしていなかつたのはまた別の話。

『ねえねえーそれより、哀ちゃんつてさあ…』

歩美は哀に向かって話しかけた。

『何かしぃりへ。
畠田さん。』

『哀ちゃんーおまつと貸してー。』

『ええ…。貸しけど…?』

(何かしぃり…?)

『あのさ、哀ちゃんの好きな人って、コナン君だしちゃ?』

やつが美が言つて、哀は耳を真つ赤にしていた。

『ふ、畠田さんーーー

私は別に……。

6

想定外の歩美の発言に、驚きを隠せなかつた。

歩美は「——」と書いて言った。

『分かるよ。

私も、

コナン君の事…、

大好きだ
もん…！』

『…

哀は歩美の話を黙つて聞いていた。

『…だから

分かるんだ。

哀ちゃんの気持ち。』

『でもね。

コナン君には好きな人が
いるんだ…。』

歩美は悲しげな表情で
俯きながら言った。

(吉田さん…。)

『 そうね。

確かに江戸川君には、
好きな人がいるわ‥。』

『 私ね。コナン君の好きな人って、蘭お姉さんじゃないかなって思
うの‥。』

『 …』

『蘭お姉さんと一緒にいたときの『ナン』想つてね、

いつも蘭お姉さんの事…見てるんだつ…。』

『だから『ナン』君

蘭お姉さんの事が好きなんじゃないかなつて…。』

『確かに…。

江戸川君は蘭さんのことを見ているわね。

だけど…。

江戸川君が蘭さんを異性として意識しているとは、限らないんじゃ
ないかしら?』

『え?』

『でつ、でも!』

じゃあ、コナン君の好きな人って誰なの?

『

(おつかしいなあ……。

歩美、絶対

コナン君の好きな人は、蘭お姉さんかと思ってたんだけどなあ……。

』

『そうね。

あえて言うなら、
江戸川君の好きな人は、

天使のような広い心の持ち主、かしら。

』

『天使のような心の広い持ち主?』

『セリフ一覧』

『なんか、歩美。』

『哀ちゃんの話し聞いたら、自信無くしちゃった。』

『吉田さん……』

やつぱり、言わない方がよかつたのかしら……。
自分の言つた発言に、哀は後悔していた。

……小学一年生に『いつどじや、なかつたたわね』。

歩美の悲しそうな瞳…。田がいのいのしていて、今にも泣きそうだ。

『歩美じゃあ、その人に勝てないよ…』

『だつて、歩美、天使様みたいに
心、広くないもん…！』

『私もそう思うわ。』

歩美は驚いていた。

『哀...ちゃんも?』

「私も彼女には、敵わないもの...。

それに...」

懐かしいこという感じの表情を浮かべ、袞は空を見上げて言った。

『それって、

歩美の頭に?のマークが浮かんでいた。

『…それって、

江戸川君の彼女、私のお姉ちゃんに似てていいのかい…』

そう言つてお姉ちゃん、

とても哀しそうに笑つていた。

(畠田あさお姉ちゃんのこと……話せるわけないわよね……。

(お姉ちゃんはある組織の一員。そして、私を組織から抜け出せるために、…。

そして、私を組織から抜け出せるために、
「10億円強奪事件」を実行した。

成功したにも関わらず、組織の奴隸お姉ちゃんの事を殺したって
…。)

『まあ、わけないじゃない……。』

歩美は哀から何かを感じ取ったのか、何も聞かないことにした。

『わ、なんだ…。』

(哀ちゃんのお姉さん、
何かあったのかな…?)

『氣にならぬナビ』、歩美が聞いて良いことじやないよね…。

まさか…。哀ちゃんのお姉ちゃん、死んじやつたのかな…。

……………「ううう、違つてー歩美の考え方だよつー絶対、違つよー。」

やつ思いながら、歩美は頭を「ンンン」と振つてこね。

『吉田さん。どうかしたの？

何か考え方でもしていたのかしら？』

哀は訪ねるよ、うに聞ぐ。

『え？ あつ…。

うつと、何でもないよ？

哀ちゃん！！

『

精一杯の笑顔で歩美は言った。

……だつてもし、哀ちゃんのお姉さんに何かあつたとしたら、
聞かない方が良いもんつ……!!

哀ちゃんが、

辛いもんね……。

『本当にこんなに私達の心を独り占めして……

責任取つて欲しいわよね……畠田さん?』

『え……?』

そうだね。

『ああこよ、『ナン期……。』

『歩美達の心、独り占めにして……。

歩美も「ナン君の心… 独り占めにしたいな!』

『わうね…。

まあ、江戸川君の心を独り占めに出来るのせ、彼女しかいないでしょうけどね。』

『良いなあー! ナン君の彼女さん! !

羨ましいなあ。

『吉田さん。江戸川君の彼女の事なんだけどね……』

何やらふたりは、「ナンの事を話していた。

『えつ。 そうなのつー?』

『そ。 江戸川君、 彼女の前だとね……。』

『ひそひそ……』

「一体何を話してこるのかは、『想像にお任せします。』

『へつへしょん!』

(…風邪か?)

噂でくしゃみをしたのだが、コナンが気がつく事はなかった。

『じゃあなつ!みんな!』

元太が手を振つて走つて行つた。

『元太君！寄り道しちゃ駄目ですよ――』

光彦は一言余計な事を言った。

『寄り道しねえーよ!』

『いやあ僕もいひですかい、顔もこれよつない。』

『じやあなーお前ひつーー』

『俺達も行ひゅせつ?』

『灰原!ー』

『ええ…そひうね。』

(博士、また私に隠れてなにかつまみ食いしたりしてないかしら~。)

…心配ね。

『なあ？ 灰原。』

『何よ。江戸川君。』

『さつや、歩美ちゃんと何話してたんだ？』

『何つて。

秘密よ秘密。

女同士の話しじよ？

…男の貴方に話せるわけないじゃない。』

『何だよ、それ…』

（まあいつか。）

コナンはポケットから携帯を取り出した。

(メール。

新一の携帯！

蘭からだ

蘭か。また『早く帰つてきなさいよー』か？

あ……違うか。どれどれ、

『新一、蘭、飯食ってる?』

食べなきゃダメよー。

事件で忙しいのは分かるけど、無理はしないでね?

…それと、たまこは顔見せてよね…。

私…新一に遇いたい。

あつ、でも、新一が事件で忙しいのは分かつてゐし、

ちよつと書つてみたかつただけだから、気にしないでね!』

『…蘭らしいなあ。』

組織の奴らを取つ捕まえたら、

『めんな、蘭…。

真っ先にお前の所に遇いに行くからな！

それまで、待つてくれ！！

蘭！

『何笑つてんのよ?』

「別に、何でもねえよ。」

『アハ。なにこだれ。』

『まつ、どうせ彼女からの

メールでも見て、

ニヤニヤしてたんでしょうけど。

』

『なつ…！？

何で分かつたんだよ？』

『じつやうりうるさいじい

コナンの頬は少し赤い。

(俺、そんなにニヤニヤしてたのか？？)

コナンは顎を手で掴んで考えた。

『貴方の事だもの…。

貴方を見てれば、分かるわよ。

それに、私も…

貴方の事が好きだから……。』

『えつ？嘘……』

『ナンは驚きを隠せずにいた。

『……嘘じゃないわ。本当よ……。』

『それとも貴方は、私が嘘をついていたのかじりへ。』

『……こや、やうは言わねえナジよ……。まさかマジ（本当）だった
とはな……』

『...私は本気よ...』藤くん...?』

…少しでも、ほんの少しでも、わかつてほしいの

私の想いを

あなたに…。

少しだけでも…。

だけど、神様は私の願いを、

叶えてはくれない…。

『…悪い、灰原。

俺はお前の事を頼れる相棒だと思ってる。』

ほり…、やつぱつ。

ドクン…

意識できねえ

『……だから、お前の事を異性として、
んだ。』

彼から見た私は、異性として意識してもらえていない。
。

ズキッ…

『俺の好きな女はただひとり、
俺は蘭以外の奴を…、好きにはなれねえし、

蘭以外のを愛する」ともできない。

『

ズキン…

ねえ…。

どうしてそんなに彼女の事が好きなの?

ズキン…

ビハーハー、私じゃダメなの？

ズキン

ズキン

『……あいつを守つてやれるのは俺だけなんだ！！』

ズキン

私だって、守つてほしいの……。

『だから、お前の気持ちは嬉しいが……、

受け取る訳にはいかねえんだよ……。

ごめんな……灰原。』

ズキン……

ズキン
...

私の事、守るって言つてくれたじゃない
...

あれは、嘘だったの？

工藤君
。.

ズキン…ズキン…

コナンがそう言い終わつた時、
哀は俯いて泣いていた

』
。.
』

馬鹿ね。私…。

いつなる事は分かつてた筈じゃない…。

工藤君は…

私に振り向いてはくれないって。

。なのに、私は、急に上藤君に告白なんかして……。

ズキッ

ズキッ

馬鹿みたい

『アーティスト、アーティスト』

。おはよう。

見
な
い
で
つ
！

『
灰
、
原
？』

そんな瞳で、
……私を見ないでよつ……！

『お前……。
泣いてるのか……？』

お願いつ！！

ドクン

これ以上…。

ドクン…

『灰原！
おいつ！？

』

工藤君といっしょに居られない

から。

エクン...

工藤君…………やぶつなら…………。

だつ
…

心中で新一にそう言つた後、哀は勢いよく走つた。

早く部屋に行つて泣きたいのだろう。

誰も居ない部屋で、たつた一人。

それが新一を困らせないために哀が選んだ手段だった。

すべては、新一の前で泣いて新一を困らせない為に

『つー?』

『灰原！灰原あ――――!』

いくら新一が叫んでも、

振り向いては……くれなかつた。

哀の…

それが、

優しさだから
。

失恋 ～哀しい想い～（後書き）

『I I I まで書くのに、ずいぶんと掛かっちゃった…。』

『本当よーー。』

『貴方、どれだけ読んでくれてる人を、待たせると思つてこるのは
？』

『…すみません』（土下座）

『まあまあ。

仕方がねえよ、灰原。』

『コナン君ーー。』（ぱああ）

『作者の文才がねえーんだからよーー。』

(がーん)

『口ナソ瓶…酷いつー…』

『だつて、本郷の！」とだろ？
なあ？灰原！』

『…』

(びび)

『そりね…』

確かに文才ないわね。』

『そ、そんなあー』

『灰原やんまださー（泣）』

『哀れやんに口ナソ瓶…』

作者さんが可哀想よー。

かみつと眞こ遇あひやなこへ。』

『蘭ちやん！…』

『やつぱつ、優しいなあ…蘭ちやんば。』

『本当にいいやつ…』

『蘭ちやん』

『やつぱつだよつ！蘭姉ちやん！…』

（…何で蘭ちやんの前だと、子供の振りするの？）

『新一くん？』

（あつ馬鹿！…

今、蘭いるんだぞ！）

（ヘンなよつ…）

（ヘンヘン…）

絶対やだもーん。)

『一人とも、何を話してるのかな?』

『ああ?』

『どうでもこいけど、そろそろ仕切つましょ?』

『ほり、作者さん!コナン君!仕切るよー?』

コ・作『あ、うん!』

全員『ここまで読んで下さって有り難う!』やれこまかー。
次回も頑張りますので、是非観てくださいー。』

『あれ?私の出番は??.』

『じめん。蘭ちゃん...

もつひよつと待つて。』

それでは、有り難うございましたー

～心の痛み（前書き）

更新です！

／心の痛み

工藤君と別れた後：

私はひたすら、博士の家まで走った。

『ハア…』

『ハアハア…』

何も考へず、ただひたすら走り続けた。

…逆に言へば、今は何も考へたくない。

自分に言い聞かせるだけで…。

もへ、精一杯なの……。

（工藤君は、蘭さんが好き…。
私じゃなくて、蘭さん。）

…やう言へ聞かせるの…、心では理解してこははずなの…。

まだ、あなたの事が好きなの…。

工藤君
…。

あなたが、まだ好き…。

工藤君…。私はどうすれば…良いの?

(ハア…ハア…)

博士の家を通り過ぎ、新一の家の前に止を止めた。

(わしこえぱ…博士と工藤君の家は、

お隣りにさんだつたわね。

)

哀は、新一に言われたことを思い出し、涙を流した。

「……だから、お前の事を異性として、意識できねえんだ。

「めんな。灰原……。

「

ズキン……

涙はポロポロと流れで止まらない。

哀は、博士が居ないことを願つて、ドアノブに手を掛け、家に入り地下室まで、泣き声を殺しながら走った。

『お帰り、哀君。』

そんな博士の言葉を聞き流し、哀は……走り去った。

『あつ、哀君？

哀君！？

』

何か、様子がおかしい。

不審に思い、声を掛けるが、走つて行つてしまつたため、原因を聞くことは出来なかつた。

（哀君…。

一体、どうしたのかのう？

)

地下室に入った私は、鍵を掛け、小さくへりまつた。

(博士には悪いけど……。

迷惑掛けたくなかつたの……。

博士、ごめんなさい……。

(

『やつぱつ、何かあつたんじやー』

博士は、電話器に手を伸ばし、新一に電話を掛けよつとした。

プルルルル…

プルルルル…

(おかしいのう…。

こんな肝心な時に、新一は何をしておるんじや？

)

また電話を掛けよつと番号を押したとき、

玄関のドアが開き、コナンが入ってきた。

息が乱れている。相当走ったのだな。

『ハア…。

ハア…。』

『新一君……電話したのに、どうして出なか……。』

『博士！……灰原は？』

『あ、ああ…。

哀君なら、帰つて来るなり地下室に入つて行つたよ

『……そつか……。』

『聞いて驚くなよ』

『何じゃ?』

『博士。』

『新一君?』

『.....』

『』

哀君の様子が変なんじゃが、何があったのか?

『新一。』

『?』

『あ、ああ……』

何を言つてしまりなのか……。

(ま、まさか！

哀君の正体が奴らにばれて……。

それで哀君は、何も言わずに地下室に……。

何でワシは……もつと早く気づいてやれなかつたんじや……。

(

博士は勝手に納得すると、勝手に自分を攻めていた。

博士！－！灰原の正体は奴らにばれてないぜ？

『おーい……』

『

『えつ…違つか？新一！

ワシはてつきり、正体かばれたのかと…。

』

『たくつ…勝手に勘違いするなよなー？』

『はは、スマン、すまん…』

あらためて、コナンは博士に話した。

『実は…俺、灰原に告白されたんだ…』

『…』

～心の痛み（後書き）

博士の反応は！？次回、明らかになります。

感想・お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0466ba/>

叶わない恋

2012年1月12日19時52分発行